

日出晴夫の

ITな話



日出 晴夫

中小企業診断士。阿南市在住

<http://www.facebook.com/haruo.hinode>

今年の夏は？

いよいよ七月になりました。梅雨明けも近いことでしょう。今年も猛暑の夏になるのでしょうか？

この数年、なぜか自然感・季節感が過激になったような気がしたりもしています。日本列島全体が季節・自然に過敏反応しているような雰囲気があります。

二ヶ月ほど前、丁度、東京での研修の最中のことでした。熊本県地方で、直下型の地震の報を聞きました。次に来る地震と云えば、東海沖、南海と相場が決まっております。小さな内陸

市民劇場；2016年7月例会ポスター



★あわぎんホール 郷土文化会館

7/8(金)夜6時半

7/9(土)昼1時半

★鳴門市文化会館

7/10(日)夜6時半

徳島市民劇場

TEL 088-653-1752

FAX 088-653-1755

型の地震かな？と思っ
たところ、思ったより被害は
大きく、現在でも余震は続
いており、歴史に残る震災
に名を連ねるようになった
ようです。

幸い(と言つては不遜かも
知れませんが)、地理的には
津波の被害は無かったので、

死傷者数もある程度に留
まったようです。しかしな
がら、熊本の知己に聞けば、
全く地震の備えなどしてい
なかつたとのこと。思いも掛
けぬ災害に人生観も変わっ
たとのことでした。

数は数字の意味だけでなく、
幾多の人々の人生の終焉が
あることを思えば、自然の
脅威に恐怖を覚えざるを
得ません。

私達の太平洋沿岸地域
も、日常生活の中に地震と
津波の恐怖が恒常的に付
き纏っているのです。意識し

て、日々を送りたいと思つています。

死生感の話!?

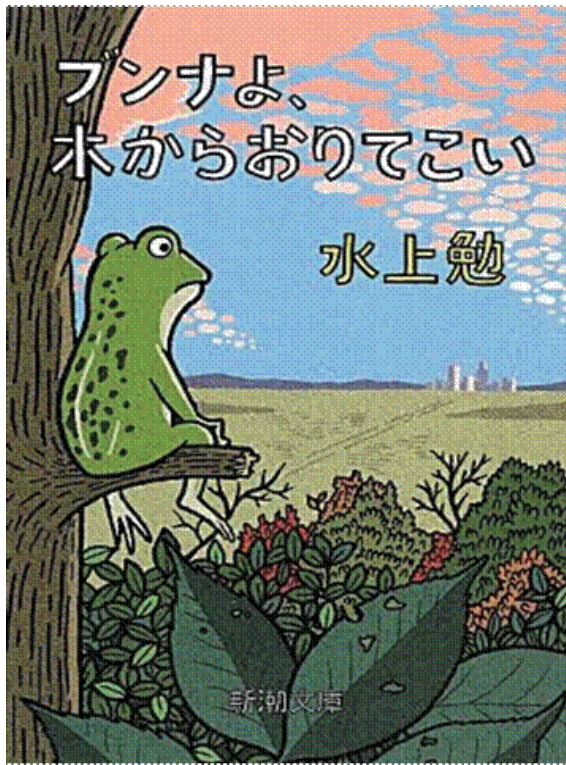
前置きが長くなりました。今月のテーマは『死生感』です。理由は、市民劇場の七月例会が、劇団青年座の『ブンナよ木からおりてこい』であるからなのです。(前ページ図)

新劇というと、シリアスな社会問題を、真面目に語る...というイメージが定着し

ていた頃があります。青年座は、その真面目さを追い続けている劇団なのです(少なくとも、私は、そう思つております)。ともすれば、軽妙な笑いが求められる現代、ストレートに「生きること、死ぬこと」について考える機会を与えてくれそうです。

ブンナとは蛙の名です

次の絵は、原作の文庫版の表紙です。実は、前ページのポスター図



案をFacebookにアップし、蛙云々のコメントを付けたところ、友人より「蛙と舞台と何の関係があるの?」という質問をいただきました。個人的には馴染みの作品ですが、読者の諸兄のためにも、少しばかりの解説を行いたいと思ひます。

原作者は水上勉さん

氏は、どちらかと云えば、社会派作家と言われています。60年代に『雁の寺』で直木賞を受賞、『飢餓海峡』、『くるま椅子の歌』などを発表しています。

舞台的には『はなれ瞽女おりん』、『五番町夕霧楼』の二作は、思い出に残る舞台でした。瞽女、遊女という社会の底辺より見る世界観の凄まじさは、感動を超える畏怖に似た感情を移入されたものでした。

そんな中、童話的な雰囲気を持った作品が「ブンナ」なのでした。

どんなストーリー?

文庫本の表紙からすれば、可愛い蛙さんの物語かな?と推測出来ますが、実は...以下、やや、長いですが、公演ちらしよりの抜粋です。

この世にはもつともっと広く、平和で、仲間の殺されない未知の国がある。そんな思いを胸にトノサマ蛙の子ブンナは住みなれたお寺の境内にそびえ立つ椎の木に登ります。

やっとの思いでてっぺんまで這い上がったブンナ。そこには、ブンナがもぐり込むことの出来る土のたまった空間があった。

太陽が輝き、風に草花がそよぎ、うまい虫までが飛んでいる。天国だ——!しかし、そこは鳶の餌ぐらだったのです。次々と連れてこられる傷ついた雀、百舌、鼠、蛇たち。彼等は「死」を前に壮絶な戦いを繰り広げる。

天国から地獄に突き落とされたブンナ。土の中で怯え、慄きつつ、なを生きることを考える。季節は秋から冬へ、そして長い長い冬

眠——。春がやってきた。眠りから覚めたブンナは鼠から生まれ出てきた虫たちを食べ、仲間が住むお寺の庭へと降りて行くのでした。

牧歌的な童話のようですが、死生感の奥底に迫る厳しさを持っています。そして、希望に溢れる結末。

加えて、余談のことですが、かつての新劇のように、表立った政治性もありません。そんな理由より、中高校生の演劇部の演題として選ばれることが多かったのです。(これは、私独自の解釈です。関係者の皆さん、ごめんなさい。)

この誌面では、市民劇場入会を勧めることは少なかつたのですが、七月例会は、お奨めの作品です。是非、試しに入会してみてください。

中小企業白書は?

例年恒例の白書解説が、未だ出来ておりませんが、来月号に期待下さい。